

「文学の価値」について

… 李光洙の初期文学観 …

波田野節子

I.

II.

III.

IV.

V.

キーワード：李光洙、情、進化論

一九一〇年三月『大韓興学报』第十一号に掲載された「文学の価値」は李光洙（一八九二～一九五〇）が初めて書いた文学論であると同時に、「現在まで我韓文壇では一度もこのような言論をみたことがない。」と文中で李光洙自身がのべているように、朝鮮でも最初の文学論である。一九〇五年、十三才のとき日本に留学した李光洙は当時十八才で明治学院中等部五年生に在学中であり、この論説文が発表された月に卒業帰国して五山学校に赴任した。中学時代に文章行為を開始してから、五山で日韓併合をむかえて創作活動を一時中断するまでの約二年間に、李光洙は詩、小説、論説文など十数編をあらわしている。このころの李光洙は、文学をどのようなものと考えていたのか。本稿ではこの短い文学論を手がかりとして、李光洙の作家としての出発点における文学観を考察してみたい。

I.

一九〇五年に第二次日韓協約によって保護国に転落した大韓帝国は、「文学の価値」が書かれたころ、名目上の独立すら失おうとしていた。一九〇九年一〇月の安重根による伊藤博文暗殺事件がまきおこした当時の東京の雰囲気、李光洙は後に次のように回想している。

「この事件で、日本の新聞の論調は韓国にたいしてますます強硬になった。（中略）われわれ年端のいかないものたちにも、時局が急転直下し、もっと大きな不幸が目前に迫ってきていることが感じられた。」（「わが告白」）

「文学の価値」が書かれたのはこうした騒然とした雰囲気のある東京においてである。東京の大韓帝国留学生は長いあいだ出身地別の団体を乱立させて一本化しなかったが、事態の切迫にうながされ一九〇九年に入ってようやく大同団結し、大韓興学会を成立させた。『大韓興学报』はその機関誌で、世界情勢の紹介、自国の現状分析と批判のほか、哲学、教育から、医学、工学、商業、農業、林業にかんする論説と実際の知識の紹介など、あらゆる方面にわたる啓蒙総合雑誌であった。「文学の価値」が発表された第十一号（一九一〇年三月）と翌第十二号（四月）には、李光洙が朝鮮語で書いた最初の短編小説「無情」が連載されている。だが翌月の第十三号を最後に『大韓興学报』は廃刊され、八月には大韓帝国は消滅する。「文学の価値」は留学五年目の十八才の少年が、このような「極限的な状況」のなかで書いた文学論なのである

「我韓の現状はもっとも危機に瀕し、全国民は実際問題のみにとらわれているため、実際問題に疎遠にみえる文学などに対しては注意する余裕がないのであろう。」と「文学の価値」で李光洙は書いている。「だがしかし、文学は果たして実際と没交渉の無用の長物なのか。」自分で提起したこの問いに答える形で、文学が「無用の長物」ではないことを主張するのが、この文学論の目的である。つまり文学とは「実際問題」と「交渉」をもつ有用な存在であるというのが、この論文の主張であり、「文学の価値」とは「実際問題」における価値であることは、冒頭から明らかにされている。「実際問題」が祖国の独立問題であることはいうまでもない。

II.

「『文学』という字の由来ははなはだ遼遠としており、確実にその出処と時代をきわめることは難しい。だがともかくその意味は本来『一般学問』であったのが、人智が漸進し学問がだんだんと複雑になったので、『文学』も次第に独立してその意味が明瞭になり、詩歌・小説など情の分子をふくむ文章を文学と称するに至った。」

十八才の少年が独自に考えたものというより、「古来より幾多学者の定義が紛々し」てきた他の文学論から、自分なりにとりいれて整理した文章であろうと思われるが、この記述で注目されるのは次の二つの点である。第一は、文学とは「情の分子をふくむ文章」であるという定義であり、第二は、人の知識はしだいに深まり学問は複雑化していき、それにしたがって「文学」という語も独立して意味が明瞭になってゆくという、進歩・発展の観念とむすびついた進化論的発想である。このふたつは、これにつづく東洋と西洋の文学の発達程度の差異にかんする記述のなかにもあらわれている。すなわち、東洋は「気候不調で土地不毛」のために衣食住に及々として智と意のみ重視した結果「情」が蔑視されて文学が発達せず、西洋は「気候温和で土地肥沃」なために「情」の存在と価値が自覚されて文学が発達したという説明は、外的条件によって「情」の価値が重要視されればそれにしたがって文学も発達するということであり、「情」と文学の表裏一体性と文学進化論のふたつがむすびついたものである。

ここで李光洙は、東洋では自然条件が西洋に比して恵まれていなかったことが、

「情」がおろそかにされて文学の発展がおくれた理由であるとしているのだが、このような重大な結果をみちびきたす原因としては、気候や土地などの自然条件はあまりに単純である。おそらく李光洙にとって重要だったのは、土地や気候などという原因としての外的条件よりは、西洋の文学が東洋よりも優れているという結果としての現状のほうだったのであろう。文中のほかの箇所では、気候と土地が「国民の程度」「時勢と境遇」という語に、なんの説明もなく言いかえられている。李光洙の眼中にあったのは西洋文学の優越という現状であって、その原因が「気候」でも「時勢」でもたいした違いはなかったわけである。「文学の価値」における「文学」とは、それゆえ西洋文学を理想像としたものであり、東洋の文学はそれを追って進化してゆかねばならない存在であると、李光洙が考えていたことがうかがわれる。

さてそれでは「情の分子をふくむ文章」である文学は、人智の漸進とともにどのように発達したのか。それに関して李光洙は二ヶ所で説明をおこなっている。ひとつは、「もともと文学はたんに情的満足すなわち遊戯として発生したものであり、多年にわたって遊戯と考えられてきた。しかし次第に進歩・発達するにおよんで理性が加わり、吾人の思想と理想を支配する主権者となり、人生問題解決の担当者となった。」もうひとつは、「今日所謂文学は昔日の遊戯的文学とはまったくちがいが」、「人生と宇宙の真理をあらわし、人生の行路を研究し、人生の情的状態（すなわち心理上）と変遷をあきらかにする」ものになったという記述である。

このふたつには、先ほどよりもさらに明確に文学進化論的思考があらわれているほかに、「情の分子をふくむ文章を文学と称する」という文学定義における「情」の意味を李光洙がどのように考えていたかを知ることがも含まれている。それはほぼ次の三つに整理できると思われる。

第一に、文学が「情的満足すなわち遊戯」から発生したという認識は、文学がもつ感情の浄化作用、いわゆるカタルシスの効用をいうものと考えられる。その場合の「情」とは喜怒哀楽など人間の本来もっている感情であり、李光洙の場合にはとりわけ美や快感を本能的にもとめる性向を意味しているようである。この認識は、一九一六年の文学論「文学とは何か」になると、文学は「美醜喜怒哀の感情をともなう」あるいは文学は「美感と快感を発生しめるもの」という説明にな

り、「文学とは人の情を満足させる書籍である」という文学定義にかわる。だがそれと同時に、「情の満足とはすなわち興味である」から作品の題材には人に興味をあたえるものがよいとするなど、のちに李光洙文学が通俗文学とよばれる兆しをみせている。

第二に、文学が「人生の情的状態（すなわち心理上）と変遷をあきらかにする」というのは、作中人物がある事件に遭遇したとき、事件の発展に応じて、その人物の情つまり心理がある状態からある状態へとどのようにうつり変わってゆくかをあきらかにするということであって、この場合の「情」とは心理をさすとみてよい。李光洙がこのころ日本語で書いた短編「愛か」においても、朝鮮語の短編「無情」においても、作中人物の心理をくわしく書き込んでいるのは、意識的におこなっていたのだということがわかる。一九一七年の長編「無情」で李光洙は、心理小説といえるほど作中人物の心理変化の描写に力をそそいでいる。

第三の、文学が「思想と理想を支配する主権者」であるという記述における「情」の意味は、「文学の価値」全体の主張と直接かかわっている。いま述べたように文学は人の情、即ち心理を明らかにするものであるが、そこからもう一步ふみこんで、人の情そのものに働きかけて変化を生ぜしめ、ついには行動に至らしめる力をもつ、つまり文学は人の心のありさまを写し出すだけでなく、その心を支配して動かすと李光洙は考えたのだ。ここでの「情」は人を動かす力、行動の原動力、情熱とでもいうものを意味する。こうして「情」を分子とする文学は、その「情」によって人の「思想と理想を支配」し、人を行動にむかわせる「人生問題解決の担任者」になりうるのである。

「情の分子をふくむ文章」である文の学進化についての記述から、李光洙の「情」という言葉が意味していると思われるものを「感情」「心理」「情熱」という三つの形に整理してみたが、もちろんこの三つは切りはなして考えられる性質のものではない。人の心に波をおこして惹きつけ、そのありさまを写し出してわからせ、そうすることで人の心を動かすという三つのうちの最後の段階、すなわち人を動かすというところに李光洙は文学の功利的な価値を見たのであろうが、それには前の二つが前提不可欠であるのはいうまでもない。李光洙が文学の「普遍的な価値」とよんでいるのは、これら全部をあわせたものである。

Ⅲ.

さてこのように文学の「普遍的な価値」を説明したあと、つづいて李光洙はこの文学論の本題である「我韓の現状」における文学という問題にはいる。

「西洋史をお読みになった諸氏はご存じだろうが、今日の文明は果たして何によって来たか？」ニュートン、ダーウィン、ワットなど自然科学者による科学の進歩ももちろん重要であるが、実はその淵源は十五・六世紀の「文芸復興」で人民が思想の自由の自覚をしたことにあるのだ、と李光洙は述べる。西洋の科学文明の発展の背後には、それにさきだつ思想の変化、精神の変動があるという認識である。

ところでこの、科学の革新にはそれにさきだつ精神の革新がなくてはならないという考え方は、西洋からは進んだ技術を取り入れて物質的な開化をおこないながらも、精神のほうは東洋伝来の儒教を固守していこうとする、いわゆる「東道西器」思想の否定にあたる。田口容三氏はその論文「愛国啓蒙運動期の時代認識」のなかで、「一九〇九年ごろは『東道西器』的思想が強まったように思われる。少なくとも愛国啓蒙団体の月報を見るかぎりでは、儒教を根本から否定する文章は掲載されていない。」と述べている。そうした朝鮮の状況を考えるなら、一九一〇年の東京で十八才の李光洙が、思想の変革をとまなわない科学文明の進歩はありえないという主張を堂々とおこなっていることは注目すべきであろう。

しかしながら李光洙のこの主張は抽象的なものにすぎず、このころの李光洙が儒教を否定していなかったことは、『大韓興学報』の前月号（第十号）に掲載された論説文「今日我韓青年と情育」を見ればあきらかである。この論説文で李光洙は人間の自由な「情」の発露を阻害する硬直した因習社会を攻撃しているが、回復した「情」をもって行動にうつされるべき倫理とは、「貞」「孝」などの儒教倫理であり、理想例としてあげられているのも「烈女孝婦」や「忠臣烈士」である。李光洙が攻撃したのは、人間から行動の自律性を奪う抽象的な「社会」ではあっても、現実の朝鮮社会を律している儒教倫理ではない。

貧窮生活のすえ孤児となって東学に入り、一進会の留学生として十三才で日本にわたった李光洙が、十八才のころに朝鮮の儒教を深く知っていたとは考えにくい。また、貧しい祖父と妹しかのこされていない彼には祖国との接触も多くはなかったことであろう。彼の思索行為は日本の学窓生活のなかでおこなわれてい

た。その彼がこの時期もっていた社会観は、日本で耽読し心酔していた文学に触発されていくにいたった、きわめて文学的な社会認識によるものであったと思われる。それゆえ「文学の価値」で李光洙が「文芸復興」という西洋の歴史をひきあいに出して、精神の改革が技術の革新に先立たねばならないと述べているのは、現実の朝鮮社会の矛盾からみちびきだされた主張というよりは、書物による抽象的な思考の結果とみるべきであろう。このあと帰国してはじめて祖国の現実と出会った李光洙は、人間本来の自由を束縛する因習とは実際の朝鮮社会においては儒教倫理であることに気づき、二度目の留学時にはげしい儒教攻撃をおこなうことになる。しかし、その攻撃はあくまでも人間の自律性をうばうものとしての儒教にたいするものであり、自己を束縛するものにたいする反抗という主観的、抽象的な内的欲求からくるものであって、社会条件の客観的分析からみちびきだされた合理的な必然性をともなうものではなかった。李光洙の場合、文学的な社会認識が先にあったことが、現実の社会矛盾と真に出会うことをさまたげたように思われるのである。

さて、西洋の科学文明の源は自由思想の自覚という精神の変革であったと述べた李光洙は、つづいて文学者がその精神変革に寄与しうることを、またも西洋の歴史の例をひいて主張する。すなわちフランス革命を「演出」したのは「革新文学者ルソー」であり、北米の南北戦争で北部人民の奴隷愛憐の情をうごかして奴隷解放にみちびいたのはストー夫人やフォスターら文学者の力であったというのである。文学が人間の精神をうごかし、結果的に社会と歴史をうごかしたという文学の力に対する大きな評価は、「我韓の現状」において文学がはたすことのできる役割への李光洙の期待をあらわしており、文学者が文学によって人民の自覚をうながす煽動力とそれを伝播させる宣伝力を有しているとする「民族改造論」への出発点でもある。

このように西洋史を見れば科学文明の背後には人間の精神があり、その精神にたいして文学の力が大きな影響力をもっていたことを述べてから、李光洙はつきのように結論を下す。

「そもそも累億の財が倉庫にあふれ、百万の兵が国内にならび、軍艦・銃砲・剣戟などの武器がらっぱであったとしても、国民の理想が不確かで、思想が劣つておれば何の役にたとう。されば一国の興亡盛衰と富強貧弱はまったくその国民

の理想と思想いかにかかっているのだ。それではその理想と思想を支配するものは——学校教育にあるとはいえ学校ではたんに智を学ぶのみで、そのほか得られぬであろう。しからばすなわち何か。曰く『文学なのだ。』

対比されている「財」・「兵」・「武器」は「物質」、「理想と世界」は「精神」という語におきかえられるだろう。国家の「興亡盛衰富強貧弱」を決定するのは物質ではなく、その国の人間の精神であり、その精神を支配するものは文学であるという図式で、李光洙は国家と文学をむすびつけ、危機にある「我韓の現状」における「文学の価値」の大きさを主張したのである。

IV.

ところで、この結論部分の抽象的な記述のなかで目をひくのは、「学校ではたんに智を学ぶのみで、そのほかは得られない」という、学校教育に対する不信の実感をともなった言葉である。精神をやしなうものは文学であり、それは学校ではまなべないという論理は、いかにも十八才の文学少年らしいものといえる。中学校卒業後、高等学校進学をせずに五山学校の教師として帰国したときの心境を、五年後に李光洙は中編「金鏡」の主人公金鏡にたくして、「学ぼうとすることは、かえって天才を束縛するもとだ」と書いた。天才詩人であると自負していた自分に対する反省が李光洙にこの言葉を書かせたのであろうが、これは彼が中学卒業を前にしたこの時期、文学の分子たる「情」と学校教育でまなぶ知識とを対立的にみなしていたことを示している。

さきあげた「今日我韓青年と情育」においても李光洙は、学校教育でおこなうのは「智育・徳育・体育」にすぎず、行動の原動力である「情」をまなぶ「情育」がないという批判をおこなっている。「情」をまなぶとは、「情」を分子とする文学によりインスパイヤされることによって最終的に行動の原動力、「情熱」を獲得することである。だが「情」の存在価値が認められなかった東洋においては文学は発達しなかったと「文学の価値」に書いているように、李光洙は「情育」をおこないうほどの文学が朝鮮にあるとはと考えていなかったはずだ。文学によって「情」を育てるといっても、その文学はどこにあるというのか。これは「理想と思想を支配するものは…文学である」という「文学の価値」の結論ともふかくかわる問題である。

その答えは筆者が先におこなった指摘、李光洙の念頭にある文学とは西洋文学のことであり、東洋文学とは西洋文学を理想像として進化してゆかねばならない存在だと李光洙が考えていたという点にある。「情」のないところに文学がなく、文学がないところに「情」がないという循環論を打ちきるのは、西洋文学をモデルとして李光洙（たち）がこれから創造する文学である。本来は「情」のあるところに文学が生ずるのだが、それを逆に文学によって「情」を育てようと主張したのが「今日我韓青年と情育」なのである。

だがひとくちに西洋文学といっても、その意味するところは広くて、曖昧である。十八才の李光洙が西洋文学という語であらわしたものと、彼が知っている西洋文学、すなわち彼がそのころ愛読した西洋作家の文学だと考えるのが自然であろう。李光洙の当時の日記や、回想録にあらわれたこの時期の読書歴によれば、李光洙がこのころ心酔していたのはバイロンだった。李光洙というとすぐトルストイとむすびつけるのが一般的だが、中学卒業を前後するこのころ、李光洙のトルストイへの傾倒は一時的に峠をこしており、社会のみならず神にすら反抗するような強大な意志と自尊心をもつ人格を描いた「海賊」や「カイン」のような作品が自分を惹きつけていたことを、李光洙は「金鏡」や「彼の自叙傳」などで語っている。李光洙は自分がバイロンの詩から得たものを、今度は自分が同胞にあたえたいと望んだのだろう。では、李光洙がバイロンの衝撃によって得たものとはなんだったのか。「今日我韓青年と情育」の主張から推して、それは人間本来の自由を束縛する義務や道徳などの社会慣習とは無関係に、自分を個人として自覚し、自己固有の意志をもつということ、いわゆる自我の覚醒だったと思われる。

李光洙はこの主張を、長編「無情」のなかで、主人公イ・ヒョンシクが自分の情を解放させることによって個人の自覚を得てゆく過程として小説化している。ソンヒョンとスネ二人の若い女性に英語を教えながら、ヒョンシクが「人生は楽しもうと思えば楽しめるものだ」と、それまでのストイシズムをすてて女性の美しさをありのままに受け入れる場面、悲惨な最後をとげた恩師の墓を前にしながら、自然の美しさと横にいるケヒャンの魅力に酔い、生きていることの喜びを肯定したい若々しい欲求に身をゆだねてケヒャンの手をとり、ヨンチェの死体搜索を「楽しいピクニック」にきりかえてしまう場面は、それまでたてまえの社会常識や道徳にとらわれていたヒョンシクの情が解放される場面であり、それによつ

てヒョンシクは帰りの夜汽車の中で世界との新しい邂逅をおこなうことになる。

「笑うのも泣くのも決して自分の心からひとりてに流れだしてきたのではなく、まったく他動的であった。自分が今まで正しい、まちがっている、悲しい、うれしいとしてきたことは、けっして自分の知の判断と情の感動によるものではなく、完全に伝習にしたがい、社会の慣習にしたがってしてきたことなのだ。」

こうあるべきだという社会の常識にしたがってではなく独自に存し感じ動く「自己」という存在、この存在にたいする自覚はヒョンシクの場合、自分の内部からあふれ出る本能のような自然の感情を抑圧することなく容認することから生まれたのである。李光洙自身、自分の本能的感情を解き放つことで個人としての自覚を得たという経験をもったのであろう。自分は一時期「本能満足主義者」だったと、李光洙は回想している。そうした文学的な自我覚醒の経験をもった李光洙は、同胞にも文学によって個の自覚をあたえることができると考えたのだと思われる。

李光洙が「文学の価値」で、物質の改革にはそれにさきだつ精神の革新がなくてはならないという抽象的ないまわしで主張しているのは、具体的には自国の人々が各自この個人としての自覚をもたねばならないということであった。個人としての自覚をもってはじめて国民としての自覚があり、そこに自己を国家とを同一視する国民精神も生まれうるからだ。

李光洙の場合、その自覚は「知」に対立する「情」によってもたらされるのであって、「情」は力と行動の起爆剤のような役割をになわされていた。金允植氏は、『少年』創刊号（一九〇八年）巻頭に掲載された崔南善の新体詩「海から少年に」（この詩にもまたパイロンの影響が見られる）にかんする評論のなかで、この詩において海が象徴しているものは「力と純潔」であるが、それは方向性をもたない「盲目」で「白痴美」に近いものであり、何のためという方向性をもたない「力と純潔」などはないほうがましな場合もあるのだと、この詩のもつ危険性を指摘している。同じ言い方をするならば「知」と対立する李光洙の「情」という原動力も、人間をどこへ向かわせるかわからない危険性をもっていた。だがしかし、これらの作品の背景には、方向性を云々する以前のさしせまった問題として、行動と力が必要とされていた「極限的な状況」があったことは考慮されねばならないだろう。少なくともその「極限的な状況」においては、力と行動のお

もむく方向は指定するまでもなかったからである。

V.

以上、「文学の価値」を中心に、李光洙の作家としてのスタート地点である中学卒業前後の文学観を考察してみた。「幾多学者」からの借りものと思われる抽象的で大袈裟な字句がめだつとはいえ、十八才の李光洙なりにそれらの意味は一応把握されているといってよい。李光洙がこのあと書きたいいくつかの文学論は、この時期の文学観を土台としている。

一九一六年の「文学とは何か」は「文学の価値」にくらべて格段に文章が洗練され、文学論としての体裁もとのっているが、その核心的な部分である「文学と民族」の項の内容は、文学が民族精神におよぼしうる影響力という「文学の価値」の主張がより明瞭なたちで進化論とむすびついたものである。李光洙は、文学が民族精神におよぼす影響があたかも獲得形質の遺伝のようにつかさねられてゆくことによって、民族精神が変革されてゆくと考えた。「民族改造論」の方法論は、このころすでに定まっていたのである。また、文学論だけでなく、李光洙が二度目の留学時代に著したほかの論説文も、くわしく見れば最初の留学時に書かれたものを敷衍したものが多し。李光洙は中学時代に到達した思想的地点を、そののちも当分のあいだ拠点としつづけたのである。一九二〇年に上海で書かれた「文士と修養」で、「長い惰眠をうち破り新しい文化を建設する活気ある精神力を民族に注入」するのが文芸の力であると述べているのも、「文学の価値」の主張から大きくへだたるものではないし、例としてあげられているのも、「文学の価値」と同様にフランス革命のルソーや文芸復興である。

だが、一九二一年に上海から帰国したあと書かれた「芸術と人生」のころから、李光洙の文学論には変化があらわれてくる。「極限的な状況」は過ぎ去っても、道を模索しつつ生きてゆかねばならぬことを覚悟した三十才の李光洙の心境が、文学論にも反映したのだろう。しかし十八才の李光洙が「極限的な状況」のなかで身につけた外部世界とのかかわり方は、変わらなかったように見える。李光洙の小説の主人公たちが、周囲の現実苦しめられ、あらいながらも、どこなく現実感覚に「ずれ」のようなものをもっており、真っ正面からわたりあう感じが稀薄であるのが、筆者にはつねに不思議であった。目の前にある事実をそのま

ま見るのではなく、自分の内部に働きかけるものとして見る、つまり常に自分の「情」を媒介として見るような外界との主観的な接し方、それは作者である李光洙自身の世界とのかかわり方であり、先に述べたように、李光洙が現実と出会う以前に「今日我韓青年と情育」にみられるような文学的な社会認識をもってしまったことに起因しているのではないだろうか。

参考文献：

- 『李光洙全集』三中堂 一九七一
『大韓興学報』上下 亞細亞文化社 一九七八
金允植 『近代韓國文學研究』3、草早期の文学論と批評の様相 一志社 一九七三
// 『(続) 韓國近代文學思想 IV』、2、六堂の少年 瑞文堂 一九七八
波田野節子「獄中豪傑の世界…李光洙の中学時代の読書歴と日本文学…」(『朝鮮学報』掲載予定)